14

シンガポールとマレーシアのコミック

チェンジュ・リム

中垣恒太郎 訳

近年、漫画が史実の一部として認識されるケースが大幅に増えており（私もそこに貢献しているが)、コミックの歴史的な流れとその作品および人気に疎い作家による誤った解釈を避けるためには、漫画はその歴史的な背景を考慮したうえで注意深く読まれる必要がある、と編集者たちは問題提起している。編集者は「現代の歴史家は文書をそれだけでは意味がうまく掴めない難解なテキストとして読む傾向がある。しかし、漫画やその他、視覚的な資料は依然として批評的な分析がなされていない……。漫画に対する歴史的考証をし、漫画自体を理解するには、それが制作されてから受け入れられるまでの過程が理解されなければならない」と指摘している。つまり、漫画は「現実をただ受動的に映すものでも、読者に消極的に受け入れられるものでもない文化的な産物」(Scully and Quartly 2009: 1) として読まれる必要があるのだ。

我々は自らの経験と歴史の産物である。かつては学生として、現在は歴史の教師として、私はコミックと漫画を研究する際、社会・政治・経済の歴史的なレンズを通してそれらに接したいと常に心がけている。作品は作品だけで単独で読むことはできないし､読まれるべきでもない。歴史的な感覚が重要であり、そのような観点からコミックや漫画を読むことにより、特に国際化の影響や民主化の進展といった現在の政治および社会に対する洞察が得られる。このことを証明するためにシンガポールとマレーシアの例を紹介していきたい。

リム.indd 177 2010/09/15 13:01:38

1　シンガポール

以下の例は2009年にシンガポールで出版されたコミック本の一部である。

1)『*The Illustrated Men In White*（ザ・イラストレイテド・メン・イン・ホワイト）』。1959年以来シンガポールを統治する政党である人民行動党（PAP）の躍進の歴史について書かれたベストセラーのグラフィック版である。これは戦後のシンガポールの歴史をコミック本の形式で焼き直した典型例と言える。

2)『*Fixed!*（フィックスト！）』。シンガポールの人々が「カルテル行為を理解し・・・・・・、シンガポール公正取引委員会（CCS）に関心を持たせる」ようにCCSから出版された無料のコミック誌である。それによれば、CCSは競争法（2005年）を定め、施行し、競争市場を維持し促進するために設立された。

3) トロイ・チン（Troy Chin）による「*Loti* Vol. 1（ロティ・ボリューム1）」。チンはシンガポールで現在活躍中の最高のコミック作家の1人。しかし、小学校の生徒達と1匹の犬の冒険について描かれた彼の最新の作品は、その形式（4コマ漫画）とタッチ（軽いユーモア）の点で、人気漫画である、あずまきよひこの「あずまんが大王」を見習っている。

これらの本にざっと目を通した読者は、次の2つの結論に達するであろう。

第一に、コミック本はシンガポール政府の政策を、たとえば「*Fixed!*」のようなコミック本がプロパガンダの一つとして用いられているということである。シンガポール・プレス・ホールディングス（Singapore Press Holdings,）により出版された、『*The Illustrated Men In White*』の場合、掲載されたストーリーは政府寄りのものである。

第二に、現地のコミックは日本のマンガの影響を大きく受けており、シンガポールの現在の政治や社会情勢に関する限られた情報のなかでのユーモラスな内容を主としている。シンガポールで人気があるその他の文化がそうであるように、コミック本もまた、シンガポールの実際の生活からかけ離れている。

シンガポールの主要な新聞に掲載される政治漫画、特に『*The Straits Times*（ストレイツ・タイムス）』のデンコイ・ミール（Dengcoy Miel）や『連合早報』のハン・キム・ソン（Heng Kim Song）によって描かれる漫画においてさえ、実際の政治について描かれることはめったには無く、政治家を茶化す

リム.indd　178　2010/09/15　13:01:38

こともない。せいぜい政府の「手ぬるい」政策をからかう程度で、人種、言語、宗教、競争／政府一般について触れられることはない。ミールとハンはその技術と国際的な受賞歴からシンガポールを代表する漫画家の2人と言えるが、皮肉なことに彼らは国内のトピックスに関する漫画は滅多に描かない。外国の指導者に対して茶化しはするが、自国の指導者に対してはそのようなことは決してしない。その意味では、彼らの漫画は政治的でも時事的でもなく、主要な記事にイラストを添えているだけである（Lim 2000）。

しかし、シンガポールのコミックと漫画の歴史を振り返ると、そんな現在の状況は以前とは異質なものであることが分かる。20世紀初頭以来、メディアは社会変革のための力として用いられてきた。新聞に描かれ出版された漫画は、イデオロギー的で政治的な含意により形成され、社会の変化の一部を映しかつそれに影響を与えてきた。

1900年代のシンガポールは英国の植民地政策下にあった。しかし、1907年のシンガポールに風刺のきいた表現を中国人大衆に提供する大きな政治勢力が登場した。それは『中興日報』と称する革命的な中国語の新聞であり、過激な政治的勢力の出現だった。そこに掲載された漫画は20世紀前半のシンガポールにおいて歴史的な役割を果たした。

『中興日報』（1907～10年）は、中国の清政府を打倒するために孫文によって設立された革命政党、シンガポール同盟会を起源とする。中国のその革命政党は漫画を用いて政治的メッセージを大衆に伝達した。文字と絵により構成されるマスメディアである漫画は、孫氏の新しい中国のビジョンのプロパガンダとして使用された。孫氏自身、ペンネームで『中興日報』に記事を書いている（Chen 1967）。

シンガポールでの最初の漫画は『中興日報』の1907年9月版に掲載されたものである。これはシンガポールの中国語新聞が広告外のスペースに絵を掲載した最初の例となった。1907年9月9日からおそらくは編集者の変更により漫画の掲載をやめた1908年3月21日まで、全部で41の漫画が掲載された。全てが反清王朝的な漫画で、中国政府を攻撃していた（Yeo 1995: 83）。

そこには清政府が海外の中国人の貿易に対して行った措置、特に彼らに課した高い税金を漫画に描き、現地の中国人商人の関心を引こうという試みがあっ

リム.indd 179 2010/09/15 13:01:38

た。それらの漫画はシンガポールの中国人達の反清王朝の気分を高揚させ、彼らを孫氏と同盟会の革命的大義へと駆り立てた。

以上の通り、シンガポールでの中国語の漫画の出現は偶然ではなく、中国政府に対する抗議の手段、革命の一環としての意図的な活動であった。漫画は清王朝の専制に対抗する指導者たちの考え方と合致した。その結果、清王朝とシンガポールの英国植民地政府の迫害から逃れるため大半の漫画は匿名で描かれた。実際、迫害の危機は 1908 年に現実のものとなり、英国は中国に対する煽情的な主張を行ったことを理由に、孫氏と中興日報の編集者に対し国外追放命令を発すると脅迫した（Yong 1991: 31)。

実際のシンガポール在住の中国人の人口（1911 年当時 21 万 9577 人）に対し、『中興日報』の発行部数は 1000 部にすぎないものであったが、『中興日報』が実際の売上と発行部数以上に存在感を持ち読まれていたことを忘れてはならない。新聞は読者から読者へと回し読みすることができた。漫画は読み書きできない人々でも理解できるグラフィックの利点を兼ね備えていた。作家のヤオ・マン・ソン（Yeo Man Thong）は『中興日報』の漫画は読み書きできない人々を教化し、中国の政治状況に関する彼らの意見を伝達する上で重要であったと述べている（Yeo 1995: 82)。

清政府が 1911 年に崩壊した後も、新しい中華民国が建国され、中国当局はシンガポールでの漫画の内容を監視し続けた。新しい中華民国は、先の清政府の将軍であり中国での王朝統治の復活を望み帝国的野望を持つ袁世凱の脅威にさらされていた。同盟会の後を受けて国民党が孫氏により再度設立され、袁世凱と対立した。1914 年国民党シンガポール支部は、その主張を広めるべく新しい中国語の新聞である『国民日報』（1914 ～ 19 年）を創刊し、そこで漫画を用いて袁世凱を攻撃した。この時も、英国による国外追放の脅威のために、漫画には偽名／ペンネームが使用されていた（Yong 1991: 31)。

1916 年袁世凱が死亡しても事態は改善せず、中国はそれから 10 年間、軍属主義の暗い時代を迎え、1927 年に国民党が蒋介石将軍の指導のもとで中国を再統治するまで無法と混乱の時代が続くことになる（Hsu 1990: 482, 523)。

漫画はその時期にも騒然とした政治状況を描き続けた。面白いのは、その時期の作品にグローバリズムの萌芽を見ることができることである。1918 年

リム.indd 180 2010/09/15 13:01:38

の『国民日報』のこの漫画は、シンガポールの中国人漫画家が西洋の影響を受けていることを示している。「*Pleasures of a Rich Dunkard*（リッチ・ダンカードの喜び）」の中では、ジョージ・マクマナス（George McManus）のブリンギング・アップ・ファーザー（Bringing Up Father）のジグズ（Jiggs）のような、崩壊した中国政府の役人の疑り深い表情の似顔絵が描かれている（図1）。この有名な米国のコミックは、1913年に最初に出版され、1918年にはシンガポールに上陸していたはずである。この漫画は、ジグズを退廃と堕落の象徴として使用し、中国人が西洋を、特に米国人をどう見ていたかを明らかにしており、それは今日の一部の中国人居住区における支配的な見方と依然として同じである。すなわち、歴史は研究対象である漫画に関する情報を提供してくれるだけでなく、漫画の歴史をより詳しく解き明かしてくれるのだ。

図1　「*Pleasures of a Rich Drunkard*（リッチ・ダンカードの喜び）」（Kuo Min Yit Poh, 1918年9月18日）

これまで見てきたように、20世紀初頭のシンガポールでは漫画は政治や社会の産物であった。それは大衆向けの芸術であり、政治的大義を提供し大衆の心情を高揚させた。1930年代に多くの漫画家は、漫画は社会変革の道具でなければならないという中国人作家の魯迅の言葉に共鳴していた。魯迅は漫画と戯画についてのエッセイの中で、人々に漫画を提供する上での漫画家の主張と風刺の精神を強調した（Lu 1982）。

そのような現象は、1937年7月7日の盧溝橋事件後に反日運動の一翼を担った漫画から伺うことができる。日本が公式に中国を侵略し始めて以来、中国とシンガポールの漫画は対日戦争に対する人々の支持を取り付けるために描かれた。

漫画は新聞の一面に掲載され戦争準備にその全精力を注いだ。1937年12月、資金調達のための特別雑誌の初版が発刊された。そこには日清戦争についての記事と漫画が掲載された。

リム.indd　181　2010/09/15　13:01:38

漫画は印刷媒体にとどまらなかった。1937 年には大規模な漫画展が開催されている。1937 年 12 月 4 日から 6 日まで開催された中国人芸術家協会による国家救済漫画展は、シンガポール中国救済資金調達委員会による資金調達イベントの一環であった。

1939 年、昆明文化協会によるもう一つの漫画展が開催された。その目的は中国の戦争難民のための資金調達であり、1486.70 シンガポールドルを集めることができた（Yeo 1992: 177）。

それらの活動の代償は大きなものであった。日本は 1941 年 12 月東南アジアの侵略を開始し、シンガポールの英国軍は 1942 年 2 月に敗北した。シンガポールの陥落は英国にとって最悪の事態の一つで、日本の占領そのものが 20 世紀のシンガポールの漫画家にとって最悪の時期であった。大粛清の期間に数名の漫画家が殺され、日本軍は 1942 年 2 月に反日本の中国人容疑者を粛清した。戦争への準備に加担した中国芸術家協会のメンバーのなかの多数の有望な漫画家が殺害された。

1945 年に戦争が終結すると、漫画家は再びペンを取り日本占領下での生活を描いていく。リュー・カン（Liu Kang）による「*Chop Suey*（チャプシー）」はその代表例である。日本占領下での生活についての漫画のコレクションである「*Chop Suey*」は戦争終結後すぐに描かれ直ちに発表された。戦争中の生か死かの状況を乗り越えたリュー・カンは、日本の残虐行為を記した漫画本を発行し、世界中に日本人の「ねじれた文化」を暴こうとした（図 2）。彼は、彼と彼らの経験を漫画という形式で表現することを選択したが、それは「漫画が最も直接的で人気のある表現であり媒体だったから」である（2001 年のインタビューから）。1946 年に出版された「*Chop Suey*」には英語版と中国語版の両方があった。2 シンガポールドルという高値にもかかわらず、2000 部が出版されすぐに完売となった。この本は、日本の学者により再評価され、1990 年代に再出版されている。

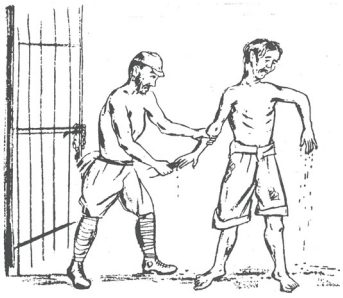

図 2　リュー・カン（Liu Kang）『*Chop Suey*（チャプシー）』におけるシンガポール占領期における日本人の残虐さを描いた場面（初出は 1946 年）

リム.indd　182　2010/09/15　13:01:38

今日、「*Chop Suey*」の漫画は「二度と起こらないように」とのメッセージとともに、シンガポール政府の国家教育事業の一環として歴史展示と学校教科書に使用されている。シンガポールは常に侵略者から自らを守る必要があり、もはや英国のような植民地支配者に頼ることはできない。このケースでは、リュー・カンの漫画が今日の政治的な目的のために使用されている。それらの漫画はシンガポールが戦時中を忘れないようにすることに役立つほか、その目的を果たすために国が選択し構成した記録原本の一部ともなっている（Lim 2004）。

図３　『*Shi Dai Bao*（シ・ダイ・バオ）』８号の表紙（1956 年 11 月５日）。シンガポールの異なる人種（インディアン、中国人、マレーシア人）の人々が独立を求める戦いのために共に行進している。男女共に自由を求めて闘っていることに注意されたい。

実際のところ第二次世界大戦後の西側勢力にとって、事態は決して同じではありえない。変化に対する追い風がアジアとアフリカに吹いており独立の機運が満ちている。漫画はその中で反植民地の側に立つ。そのような作品は 1950 年代の多くの雑誌の表紙を飾り（図 3）、そして、1959 年の総選挙で PAP が政権を掌握した時にシンガポールの英国からの独立に一役買ったのである。

しかし、独立とともに党内での政治的抗争が発生した。1960 年代には与党の PAP とその主要なライバルであるバリサン社会党がお互いを批判するために漫画を利用した。PAP はその戦いに勝利し、今日までシンガポールの与党となっている。それ以来、漫画は国家建設の中に位置づけられ批判的な性格を失ってしまった。政治は重要な仕事であり漫画家に茶化されてはならないとの政府の判断に従い、漫画はさまざまな意味で政治色を薄めていった。漫画家は些細なことについて冗談を言うだけになってしまう。漫画が政府の方針について描写する際には、それは常に前向きなものだけであった。批判的なコメントは推奨されないのだ。

1959 年以降その傾向はさらに鮮明になっていく。タン・フェイ・ペグ（Tan Huay Peng）はシンガポールの漫画史上最高の作家の１人である。彼は 1950 年

リム.indd　183　2010/09/15　13:01:39

代に『*The Straits Times*』にて、皇帝（たとえば英国の）が新しい衣装を誇示しようとするたびに怒りをぶちまけるような、多くの痛烈な政治漫画を描いていた。しかし、PAP が権力を握った 1959 年の総選挙以降、彼の漫画にはトーンと内容に明らかな変化が見られる。タンの漫画はおとなしくなり風刺の色彩が薄まったのである。1961 年タンはシンガポール経済開発庁の職に就くため『*The Straits Times*』を去ることになる（Lim 1997）。

中国の作家、魯迅はかつて次のように言っている。政治と芸術は革命時においては旅の道連れだが、いったん平和になるとそれぞれは別の道を歩み始める（Lu 1982）。1959 年から 1990 年までシンガポールの首相の地位にあり、現在はシンガポールの内閣顧問であるリー・クワン・ユー（Lee Kuan Yew）は、漫画で戯画化されることを好まず、次の首相であるゴー・チョク・トン（Goh Chok Tong）やリー・シェンロン（Lee Hsien Loong）は漫画が政治を描くことをやめるべきだとくりかえし述べている。1990 年代の初めにリー・クワン・ユーからゴー・チョク・トンへの権力移行時にベストセラーとなった漫画本は歓迎されなかった（Nonis 1991）。メッセージは明らかである。政治や政府の行動を批評したい場合には、政党に入り、リングに上るべきで、傍観者として批判すべきではないということだ。政治的な論評に関しては、漫画の役割はかなり限定的である。

シンガポール政府は、新聞や雑誌からメッセージが発せられるにあたり、媒体としての漫画の潜在的な力を充分に意識している。言葉と絵が混在する漫画は、訴求力において多くの点で長い知的な文章よりもパワフルである。シンガポール公正取引委員会が 2009 年にカルテル行為に対抗するために無料コミック誌（『*Fixed!*』）の発行を決めたのが何よりの証拠である。

したがって、シンガポールの漫画家は自国の政治に関する漫画を描かないのである。その代わり、国際政治に関する漫画を描き、他国の政治指導者についての批判や毒舌をくりひろげて賞を授与されている。現在のコミック本の作家は、ユーモアかアドベンチャーのストーリーを好む。今日のシンガポールの漫画にはある程度の自己検閲が存在するのである。

このようにシンガポール漫画の歴史を概観することで、政治と社会に対する洞察が得られ、民主主義の進展に対し疑問が生まれる。もし民主主義の指標の

リム.indd 184 2010/09/15 13:01:39

一つが、政治的漫画または戯画が存在するか否かであるなら、その結果はとても頼りないものであろう。文化庁は過去に、政治的な戯画を禁じる声明を出している。そのため今日ある政治家を描いた漫画は、(「*The Illustrated Men In White*」のような)対象を皮肉っぽく描いていない自画像だけということになる。

歴史的なアプローチにより長期的な視点を持つことで、シンガポールにおける漫画の歴史的な役割が明らかとなり、またその役割が時間とともに消滅しつつあることが分かった。それはまた民主主義の展開、出版の自由および検閲の歴史を辿ることでもあった。願わくは、この話により次の世代の漫画家たちが刺激を受け、シンガポールの漫画に歴史的役割を復活させてもらいたいものである。

2　マレーシア

シンガポールが自国の漫画の歴史に関する記憶喪失に苛なまれているとすれば、マレーシアは無視という別な形で苦しんでいる。政治的なコミックと漫画は、活気のある政界の動きを反映して依然としてマレーシアで盛んであるが(首相を笑いものにしたことで最近政治漫画本が禁止された)、ここでの問題点は、若手の漫画家が自国の漫画の伝統やスタイルに意識的に背を向けていることである。そのスタイルはマレーシアで最も有名な漫画家ラットが先駆けとなった。

2010 年 3 月 5 日ラット（Lat）は親しい友人と家族で 59 歳の誕生日を祝っている（*New Straits Times* 2010 年 3 月 15 日、S7)。ラットのマレーシアに関する 1950 年代と 1960 年代の一連の漫画、「*Kampong Boy*（カンポン・ボーイ)」と「*Town Boy*（タウン・ボーイ)」はマレーシアでの彼の人気を決定づけ、世界中のファンを獲得した。この 2 冊の本はまた（日本語を含む）異なる言語に翻訳され近年、ファースト・セカンド・ブックス（First Second books）により北米市場で再出版されている。

彼の代表作である「*Town Boy*」(1980 年）は彼の中学校時代（アンダーソン・スクール）の話で、マレーシアのイポーという街での中国人の少年との友情について描かれている。最近、ラットは学校の 100 周年記念で「世紀を代表するアンダーソンの生徒」の名誉を獲得した。この際に 1969 年卒のクラスから、ラットと同学年の 120 人以上のクラスメートがマレーシアの他の州からイポーに集

リム.indd　185　2010/09/15　13:01:39

結するためにやってくる。参加者には引退した公務員、警察官、元軍人およびビジネスマンが含まれていた（*New Straits Times* 2010 年 3 月 15 日、S7）。

多くの人が「*Town Boy*」の成長、学校のジンクス、友情の逸話を楽しんだが、大半の人は物語の持つより大きな意義を見逃していた[1]。

ラットと彼の友人たちがアンダーソン・スクールを卒業したのが 1969 年であったという事実は、その年マレーシアが 1957 年の独立以来最悪の人種的暴動に揺れ動いた年であったという意味で重要である。1969 年 5 月 13 日の暴動は、独立以来マレーシアを統治してきたアライアンス党の総選挙での敗北の結果であった。マレー人は国の支配権を失い、その優位性が中国人により脅かされるのではと感じていた。マレー人と中国人とは 1969 年に非常な緊張状態となった。暴動が鎮圧されるとすぐに緊急事態が宣言され、国会はそれから 2 年間中止された（Butcher 2001）。

これが「*Town Boy*」の背景である。ラットは物語の中でマレー人と中国人の間の人種的暴動には触れていないが、これらが彼の高校時代の最後の年に発生したという事実は、彼が 1970 年代後半この物語に取り組み始めたときに彼の心の中にあったに違いない。

ラットが生まれたのはマレーシアの反植民地運動の初期に当たる 1951 年で、そのころマレー人、中国人、インド人といった異なる人種の人たちが英国からの独立のために共闘していた。それは協力と信頼の時代であったが、民族的なグループ間で培ってきた親密な関係は、1960 年代に入りマレー人と中国人の経済的格差が拡大するに従いほころびを見せ始めた。

「*Town Boy*」では友情は金銭や階級とは無関係である。ラットの学校での親友はフランキー（Frankie）という中国人の青年である。彼らの友情はロックンロールやハリウッド映画の趣味を通して深まった。フランキーはクラスでも金持ちの青年だったがラットとの友情は続き、それは彼らの共通の趣味や一緒にやった多くのいたずらのせいであった。互いの文化を理解すれば、若くて生活が楽しい限り好き嫌いは問題ではない。

1　*Town Boy*（ファースト・セカンド・ブックス）の北米のレビュー参照。
http://joglikescomics.blogspot.com/2007/10/what-lovely-weekend.html, last access 2010/7/28
http://www.comicsreporter.com/index.php/briefings/cr_reviews/9958/, last access 2010/7/28

リム.indd　186　2010/09/15　13:01:39

以下の対話はラットの中国人青年との友情のなかで、人種の違いがいかに切り抜けられているかを明らかにしている。

ラットが初めてフランキーの家を訪問した時、パウ（ロールパン）をごちそうになった。

ラット：ロールパンの中には何が入っているんだい？

フランキー：開けてみれば！

ラット：ヤッター。「カヤ」（甘いクリーム）だ。大好物だ。

フランキー：どうして君は普段カヤを食べられないんだい？僕が頼んで・・・・・・

ラット：宗教上の理由で食べることができないのさ。

フランキー：ほかに食べられないものは？

ラット：ゾウ、犬、猫・・・・・・

ラット：ヒンズー（インド）の人たちは牛を食べることができない。

フランキー：そう。インド人は牛肉を食べることができない。

ラット：君は何か食べられないものはある？

(フランキーは黙り込む)

フランキー：羊の肉！

図4　ラット（Lat）「*Town Boy*（タウン・ボーイ）」より

リム.indd　187　2010/09/15　13:01:40

ラット：どうして？　宗教上の理由？

フランキー：いや。匂いに耐えられないんだ。(図 4)

上の例はラットのほのぼのとしたユーモアの一例である。しかし 1969 年に起こった事実を知っていれば「*Town Boy*」の意味の深さと辛らつさをより理解できるであろう。物語はラットとフランキーが卒業後別の道に進むところで終わっているが、彼らが一生の友達であり続けるという期待がある。これは 1970 年代と 1980 年代のマレーシアでの全ての政府によるキャンペーンよりも人種的調和の重要性に関する強力なメッセージといえる。

シンガポールと同様に今日のマレーシアのコミックに歴史的感覚が不足していることは残念なことである。それは単にストーリーの中味の問題にとどまらず、スタイルの問題でもある。ラットの過去に関するノスタルジックなストーリーと歴史に対する関心は、SF やファンタジーを好む若い漫画家にとっては古めかしいと思われている。技術的な観点では若い漫画家たちは外国のコミック、特に日本のマンガの影響を受けている。

マレーシアのたとえば､大成功した『*Gempak Starz*（ゲンパック･スターズ)』などのコミック本の最近の出版の歴史をふり返ると、マンガの強い影響がうかがえる。『*Gempak Starz*』はアート・スクエア・クリエーション（Art Square Creation）が出版する 1998 年に設立されたマレーシアのコミック・ゲーム・ホビー雑誌である。1997 年のアジア金融危機の後に現れ、雑誌の成功は地域文化へのグローバリゼーションの浸透や影響と同時進行した。

ACG（アニメーション、コミックおよびゲーム）における情報コミック誌としての『*Gempak Starz*』の成功は、特に日本において、独自の系列のコミック本をマレー語で出版することになり、後に中国語と英語に翻訳された。その芸術スタイルはまさにマンガであった。

『*Gempak Starz*』のアーティストの最近のインタビューから、彼らがマンガから受けた影響が窺える。

キース：「日本のコミックは最高だ。私は若いころ、まだ学校に上がる前に日本のコミック本を読んでいました。ほんの少しの言葉で優れた作品を生み出すこのコミックについての私の感動を短い言葉で言い表すことは不可能です。ただ言えることは、日本のコミックの成功は、日本人の執着心、

リム.indd　188　2010/09/15　13:01:40

こだわり、集中力の賜物であるということです。マレーシア人は物事に対してそれほどこだわることはありません。マレーシアにはコミック文化はありません。おそらく、我々はまず地域のコミックの現場で市場の隙間を見つけることが必要なのでしょう」

カオル：「私は日本のコミック作家から影響を受けてコミック業界に入った多くの人たちのうちの１人だと思います」

マレーシアのコミック業界について尋ねると、「大半のアーティストはこの業界にはまだやるべきことがたくさんあると感じている。マレーシアのコミックを日本のマンガと比較することは公平ではないが、そのうちに独自のスタイルを開発したいと希望しながらも、マンガスタイルで描くことに満足している。海外の描写スタイルを用いて現地の内容のストーリーを書くことに抵抗はないようだ」(Popcorn 2009)。

マレーシアがラットにより開拓された独自のスタイルをすでに持っていることは事実である。しかし、グローバリズム、漫画の世界的な人気と広がりおよび市場の需要により、若いマレーシアのアーティストたちはマンガスタイルの中に独自の手法を見出そうとしている。

このトレンドはマンガスタイルで描く『*Gempak Starz*』の漫画家に限る話ではない。タン・エン・ハット（Tan Eng Huat）やビリー・タン（Billy Tan）といったその他のマレーシアの漫画家が米国のコミック業界に進出し、DCやマーベル・コミック（Marvel comics）に米国の二大コミック誌独自のスタイルで漫画を描いている。チン・ユー（Chin Yew）やミン（Ming）のような若手の独立系マレーシア人の漫画家の作品の中には、ドロウン・アンド・クォータリー（Drawn & Quarterly：カナダ）やファンタグラフィックス・ブックス（Fantagraphics Books：米国）から出版された作品のような別のコミックのスタイルさえ顕著に窺える。

マレーシアのコミック本の最近の出版における歴史を見ただけで、そこにコミック産業のグローバリゼーションの影響を感じることができる。地域のアーティストが海外のコミック芸術のスタイルに対する市場の需要に応えようとするに伴い、いかにグローバルな勢力が地域の文化や経済に影響を与えているかを知ることができる。

リム.indd　189　2010/09/15　13:01:40

歴史感覚を持つことが地域アーティストを刺激し、独自の伝統やスタイルを持つことになり、その結果たとえ彼らがより国際的なフォーマットや表現スタイルに順応したとしても、いまなおその地域ならではの内容と関心の余地を残していることを、私は再度希望を込めてこの章で提示したい(再度強調したい)。今までのところ、社会で起きていることよりも空想的で奇妙なことの方に天秤が傾いている。私が好きなマレーシアのアーティストであるレオン・ワン・コー(Leong Wan Kok) とスライム (Slaium) の 2 人は、マレーシアでいま起きている政治の変化ではなく、SF や都市の恐怖に関する作品を制作している。

状況が今日のシンガポールとマレーシアの両方の作品を決定している。シンガポールに政治漫画がないことは、今日の政治的現実の結果である。マレーシアでのマンガスタイルのコミックの隆盛は、まさにグローバリゼーションの結果であるのだ。

参考文献

Butcher, John G. (2001): May 13: A Review of Some Controversies in Accounts of the Riots, In: *Reinventing Malaysia: Reflections on its Past and Future*, ed. Jomo, K.S., Bangi, Selangor, Malaysia: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, pp. 35-56.

Chen, Mong Hock (1967): *The Early Chinese Newspapers of Singapore (1881 - 1912)*, Singapore: University of Malaya Press.

Hsu, Immanuel (1990): *The Rise of Modern China (Fourth Edition)*, New York: Oxford University Press.

Lim, Cheng Tju (1997): Singapore Political Cartooning, In: *Southeast Asian Journal of Social Science* 25, 1, pp. 125-150.

Lim, Cheng Tju (2000): Political Cartoons in Singapore: Misnomer or Redefinition Necessary? In: *Journal of Popular Culture* 34, 1 (Summer), pp. 77-83.

Lim, Cheng Tju (2004): Chop Suey - Cartoons about the Japanese Occupation and National Education in Singapore, In: *International Journal of Comic Art* 6, 2 (Fall), pp. 415-430.

Lu, Xun (1982): *Essays in Art*, Beijing: Peoples' Art Publishing.

Scully, Richard and Quartly, Marian (2009): *Drawing The Line: Using Cartoons As Historical Evidence*, Victoria, Australia: Monash University ePress.

Yeo, Man Thong (1992): *Essays on the History of Pre-War Chinese Painting in Singapore*, Singapore: Singapore Society of Asian Studies.

Yeo, Man Thong (1995): Talking About the Cartoons in Chong Shing Yit Pao, In: *Singapore Federation of Chinese Clan Association 10th Anniversary Souvenir Publication, 1985-1995*, pp. 79-85.

リム.indd 190 2010/09/15 13:01:40

Yong, C.F. (1991): The British Colonial Rule and the Chinese Press in Singapore, 1900-1941, In: *Asian Culture* 15 (June), pp. 30-37.
Newspaper articles:
New Straits Times (15.03.2010): Lat Celebrates 59th Birthday with Mates, p. S7.
Magazine:
Popcorn Issue 3 (2009).
Interview:
Liu Kang, Nov. 20, 2001.
Comics/Cartoon Books
Chin, Troy (2009): *Loti*, Singapore: Dreary Weary Comics.
Collateral Damage Studio (2009): *Fixed!* Singapore: Competition Commission of Singapore.
Lat (1981): *Town Boy*, Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn. Bhd.
Liu, Kang (1991): *Chop Suey*, Singapore: Global Arts & Crafts Pte Ltd.
Nonis, George (1991): *Hello Chok Tong Goodbye Kuan Yew*, Singapore: Angsana Books.
Popcorn (2009): *Gempak Starz Artists Colouring Up Their Lives*, *Issue 3*, Kuala Lumpur: Gempak Starz Sdn.Bhd.
Straits Times Press (2009): *The Illustrated Men In White*, Singapore: Singapore Press Holdings.

リ太.indd 191 2010/09/15 13:01:40